

キーツの精神像

菊池 巨

われわれはキーツと言えば、ただちにイギリス後期ロマン派に属する詩人として考える。事實どの文學史を開いてみてもキーツはロマン派の中に位置付けられている。この常識的な事實に對して私は異論をさし挟もうとは少しも思わない。異論をさし挟むどころか彼こそイギリスに數ある詩人の中で最もロマンチックな詩人だとさえ思っている。しかしこう言う常識的な位置付けを無條件に前提として立てて考察を進めて行くことが果してキーツ理解への道であるかどうか、私はいささか疑問に思っている。一應この前提から切り離して眺めてみる時、同じロマン派の他の詩人たちとはかなり違った存在であることがはっきりする。少くともロマン派と言ふものに餘り彼を近づけて見ることは一應警戒しなければならぬことだと思ふ。

キーツの精神像

I
イギリス文學史におけるロマンチズムは公式的な結論を下してしまえば、その間に前期ロマン派と言うべきグレイ、コリンズ、クーパー、ブレイク等の詩人たちを挟みながら古典派に属するドライデン、ポープたちへの反逆であったと言うことである。この反抗への明瞭な旗幟は一七九八年二人の青年詩人ワーズワス(當時二十八歳)とコールリツヂ(當時二十六歳)の共著にかかる「抒情歌謡集」(*Irrical Ballads with a Few Other Poems*)によって擧げられた。このように書いて來るといかにも古典派とロマン派は劃然と相對するふたつの動きのように感じられる。しかしここに見逃してはならない事實が横たわっている。十八世紀末から十九世紀へかけての

時期は、二十世紀と言う追いつめられた複雑な世紀を用意する胎動期であったことを考えてみれば生みの苦しみにも似た深い苦惱があった筈である。ルネッサンスの哄笑は終った。啓蒙期も過ぎた。そして知性への確信がいよいよ深まって行く。頻發する政治革命、そしてイギリスをおそった産業革命は知性の大きな發達を意味する。ここまで成長して來た知性は既に理神論を生み出してゐた。この理神論も始めは一種の教會を擁護するための武器であつたものがその意圖をいつの間にか變えて教會を脅かすものとなつてゐた。かくして絶對の束縛を意味した神もその權威を失墜して行く。ロマンチズムもこの強力な知性の一產物にすぎなかつた。この理神論は古典派の詩人たちに濃厚な影響を與えた。知性を支柱とするこの態度は幾分の變貌をとげつつもロマンチズムによつて受け繼がれた。ロマンチズムに知性的な面が強いことはともすると忘れられがちになる。今まで人間を確固として支えて來た支柱がはずされた。人間は神なしで濟し得るか。ひとたび人間はルネッサンスと言う神を失つた大きな激動期をくぐり抜けてゐる。このためにかえ

つて人間は自からの手で人間を護らうとする望みが痛切になつてゐるはずである。また新らしく神を回復して行かなければならない。ラルー(R. Lalou)の言葉を引用しつつローマン派の四選手の心情をうかがつてみることにする。ワーズワスの神祕的な汎神論は「ルウソオとプラトンの思想に支えられて」(吉田健一氏譯「英文學史」七五頁)おりバイロンの「皮肉な心情と古典主義的な趣味は、彼の性格がむしろ十八世紀に屬するものであることを示している。彼が師匠と仰いだのはポオプとヴォルテルであつて、それだけに何と言つても彼の代表的な作品は『ドン・ジュアン』である。この詩の明かに戲文的な調子は、形式上の不備をそれほど目立たせず、そこに發揮されている想像力と諷刺の痛烈さは、遂にバイロニズムそのものを描き出すに至つてゐる。そして同時に又、この精神が『ファウスト』のよりも『カンディッド』に近いものであることも附け加えて置くべきである。」(前掲書)そしてシェリーの「理想主義は英國民族の傳統に屬するものでもあつて、彼の精神的な祖先はプラトンとスピノザであると同時にバアクレイであると言へる。」(前掲書)更にコールリ

ツヂは「この時代の最も優れた思想家として生き続けた。彼は三十年間、英國の選ばれた少数を相手に、彼の著書によって人々の思想を比類なく刺戟する役割を演じたのだ。彼は哲學に非常な興味を持っていて、カントやシェリングの學說を英國に紹介し、文藝評論をする場合にも哲學者であることを止めず、そういう仕事も或る廣大な知的な構造の一部として位置付け、シェイクスピアの最も優れた批評家である時も、決して自分自身であることを忘れなかった。」(前掲書 七六頁)このようにそれぞれ優れた知性人であった彼等が政治的關心を強く抱いていたのも無理のないことであろう。バイロンは自からギリシヤ獨立に参加してミソロンギに斃れ、若きワーズワスはフランス革命に心酔した。「抒情歌謡」の序文に於いて詩語として「中産階級、下屬階級の社會における日常會話の言語」を用いることにすると揚言したのは正しくワーズワスの政治的關心を物語るものである。シェイリは自から無神論者であることを宣言し彼独自の汎神論を展開しながら豫言の喇叭を吹くことを止めなかった。哲學者然として書齋におさまり返っていたように見えるコオル

キーツの精神像

リッヂも若かりし頃、「新しき村」に似たような一種の共產主義的な「平等社會」(Partisocracy)を新天地アメリカに打ち建てようとしていた。いずれも時代の兒たる面を濃厚に持っている。かくしてヒューム(Hume)のいわゆる、砂糖水を食卓にこぼしたような神々の氾濫の時代が現出されるのである。そしてこの神を失った混沌は二十世紀の荒地へと長くその尾を曳いて行く。

こう言つた詩人群の動きを見る時どうしてもキーツを彼等と同列に論じて行くわけにはいかなくなる。少なくともキーツは意識したロマンチストではなかった。たまたま彼の書いた詩がロマンチックな色調を帯びていたに過ぎなかつたのである。そこで文學史家が便宜的に彼をロマン派の中に組み入れたのである。強いて言ってみればシェイクスピアがロマンチストであつたと言ふ意味でキーツもロマンチストであつたのである。第一級の藝術家と言ふものはこうしたものではないであろうか。簡單にある枠内に入るものであるならば既に第一級とは言えない筈である。今ここで私がシェイクスピアとキーツを並らべてロマンチストと言つたのは兩者と

も「捕えることも出来ない空なもの」(airy nothing) (「眞夏の夜の夢」(五幕一場十六行))に場所と名前を與へ得る異常な想像力の共通を指すのである。この分析を許さない天才は他のローマン派の詩人たちとキーツをはっきり區別させる。

ここでわれわれは焦點をキーツの輪郭に向き變えなければならぬ。今まで扱った一群の詩人連はいずれも貴族かもしくは名家の出である。それにひきかえてキーツは一介の馬具商の長男として生れた。(このように中流以下の家柄の一人の男が詩人の座を占めるに至ったことは或は市民社會の成長を物語るひとつの事實であるのかもしれない。しかしわれわれは公式的に複雑な詩人の心情を推し量ることは警戒しなければならぬ。)彼の受けた學校教育というのは八歳から十六歳までロンドン北郊エンフィールド(Enfield)にあったクラーク(J. Clark)の私塾で學んだのが全部である。あとはこの塾を出ると同時に醫師ハモンド(Th. Hammond)の書生となり醫師の勉強にいそむことになる。三年この醫師のもとにいて十九歳秋にはハモンドの家を出る。二十歳の十月ロンドンの一病院(Guy's Hospital)の醫學生となり

翌年六月醫師開業免狀を下附され外科の助手となったが更に翌年にはこれを辭して、あとは詩作の生活に這入って行く。これが彼の乏しい經歷である。きわめて大雑把な言い方をすれば彼の讀書範圍はギリシヤ、ラテンの古典から彼の同時代の詩人達のものと言ひ得るのである。勿論この外に歴史、旅行記と言うようなたぐいのものも讀んではいるが、哲學的な教養が深かったとは到底考へるわけにはいかない。少なくとも形而上學的な思索には缺けるところがあった。試みにバイロンの書簡を讀んでみると、そこに縦横に引かれるギリシヤの哲學者たちによつても判る通り、そういう教養の點では同日に語るわけにはいかない。背後からキーツを支えていた所謂哲學ないしは思想と言うものはなかったことも彼の特色のひとつと言ひ得るのである。

次に時代の風潮に對してもかなり冷淡であつた。「私はこれまでいづれも蠅のように世の中のことに無關心でした」(「ハリー・モリス」)と言ふ彼の言はこれを裏書きすると言つていい。したがつてこの時代の大きな出來事である産業革命をはじめ諸所に起きた政治革命も何等彼には關

心を持たせなかった。この頃青年の心を激しくゆすぶったものにゴドウィン (W. Godwin) の思想がある。シェリーがこの思想の信奉者であったことは餘りにも有名である。キーツの友人デイルクがまたこれに心酔していたのであるが、この友人に對しては「ゴドウィン萬能主義者」(一八八・一〇、ジ) あるいは「ゴドウィン・メソジスト」(一八・九・九、二四、ジ) と冷笑するのみでこの思想にも一向興味を抱いた様子はない。

このようにしてキーツの精神形成は他の詩人達とは全く異った方法で行われて行く。

I

キーツの交際範囲は狭かった。ほんとうに氣を許していたのは、弟ジョージおよびその妻ジョージアナと更にその下の弟トマスと末の妹フランセス・メアリでありその他ごく少數の友人にすぎなかった。殊にキーツが九歳にして父トマス、十五歳にして母フランセスを失ったことは弟妹への愛を一層強めたものであろう。終始長兄たるキーツはよく弟妹の面倒を見た。そして弟妹たちも長

キーツの精神像

兄に對しては理解ある態度を示していたのであるが、殊に二番目の弟トマスは長兄の最もよき理解者であった。

あとは限られた友人と死ぬまで交際をつづけたにとどまった。自から積極的に文壇に働きかけるなどと言うことは内氣で控え目なキーツのよくなし得るところではなかった。「文壇のことは全然關知しません」(一八・九・二、二四、ジ) と言うのは事實彼の正直な態度を表わすもので、またそれよりも文壇に對しては嫌惡の情すら持っていたようである。「文士というものはいやなものです。それで私は

ワーズワス以外は誰も知りたくありません。——バイロンでさえも。」(一八・七・一〇、八、二四、ジ) あとで觸れることになるが、キーツはワーズワスに對しては終生尊敬の念を持っていた。しかしこのワーズワスとは一八一七年十二月二十七日、友人ヘイドンの畫室で一度會ったきりであとは進んで門を敲くようなこともなかった。バイロンに對しては、はじめから何の關心も持っていなかったと言った方がいである。

「私は、ほんとうに、まっぴるまの偉大さよりも、物かげの偉大さの方が好きなのです。——(中略)——私

は、自分の本で、お金をもうけようなどとは思いません。それどころか本を出すことを避けたいほどなのです。——私は人間性の讚美者ですけれども、個々の人間はきらいです。——人間に榮譽となるようなものは作りたいけれど、——人々に、めくられて、拾い読みされるような本を書きたくありません。だから、私は印刷屋の小僧さんをわずらわしたり、男の人や、女の人の稱讚をたよりにしないで生きたいのです。——そういう偉大な孤獨を喜ぶ力を、神が與えたもうよう祈っています。」(二二・三三三—二二・三三三)人間性(Human Nature)の讚美者ではあるが個々の人間(Men)の嫌悪者であるこの詩人は、「あらゆる群衆のなかの最も卑俗なもの、あの文士連」(二一・八九・三三)と更に痛切な呪詛を文壇へ叩きつける。「物かげの偉大さ」(Greatness in a Shade)を求めながら彼の精神は孤獨の裡に築かれて行くのであった。彼の精神を形成して行くのに與つて最も力のあったものは何よりも偉大な詩であったことは當然のこととして推測がつく。

時間的に云つて一番早くキーツの出會つた詩人はヴァ

ージル(Virgil)であつた。彼がクラークの私塾にいたころラテン語を學んだ。どの程度にラテン語に習熟していたかは明らかではないが、ともかく學んだラテン語を通してヴァーギルの「アエネアス」(Aeneid)を讀んだ。何歳の頃であるかは、はっきりしないが、いずれまだ十五、六歳の少年の頃であつたらうと言ふことは推測される。そしておそらく相當の興味を持つたらしくやはりその頃これを全部散文に翻譯しようと企てたりしている。勿論これは少年の力には餘る事で完成は見なかつた。一八一一年六月(十六歳)親友クラークからスペンサーの「神仙女王」(Faerie Queene)を借りて讀んだことは、キーツの方向を決める決定的な機會となつた。その感動は一八一二年の習作「スペンサーに倣いて」(Imitation of Spenser)となつて現われた。更に彼の手はチャタートン(Th. Chatterton)、『チャプマン』(G. Chapman)譯の「ホームー」へと伸びて行く。そして次第にミルトン、ワーズワス、シェイクスピアとイギリス詩壇の正統から強い影響を受けることになる。勿論彼が讀みまた實際に影響を受けたのはこれだけの詩人ではないが、細かい事

實は捨ててまずこの主なる詩人だけを取り上げて行くことにする。

最初に、スペンサーに對する彼の態度はどうであつたろうか。一八一八年一月二十三日二人の弟、ジョージとトマスに宛て次のように言っている。

「近頃、私のあたりに變化がおこつたようです。——私は長いあいだ受動状態に浸っていましたが、もう無關心であつたり、無爲にすごしてはいられなくなりました。偉大な製作をするには、知性が、徐々に、成熟することが一番よいことです。その一例として——いって見れば、——私はもう一度リア王を讀もうと思つて、すわりました。それをよむには、前ぶれに、一篇のソネットを書く必要があるように思われたので、ソネットを書いて、それから讀み始めました。——（君はそのソネットを見たいでしょう。）」

「もう一度『リア』を讀もうとして坐つたとき」

おゝ、おだやかな琵琶のような、黄金の舌をもつ

キーツの精神像

ロマンスよ！

美しい羽毛のサイリンよ！ いともはるかなる女王よ！

王よ！

この冬の日に、よい聲で、歌うをやめよ。

おまえの古い巻をとじて、沈黙せよ、おさらばだ！

というのは、もう一度、地獄の苦しみと、

燃える土くれの身との、争闘を、燃えつきるまで、

やらなければならぬからだ。もう一度謙遜に、

シェイクスピアの、この果實の、にがい甘味を味

わねばならぬからだ。

第一等の詩人よ！ アルピヨンの雲たちよ！

我々の深い永遠の主題を生み出すものよ！

私が古い檜の木を森を通りすぎるとき、益もない

夢を見ながら、さまざまにわせないでおくれ。

しかし私がその火で焼きつくされるとき、

思う存分に飛ぶ新しい不死鳥の翼をあたえておくれ。

れ。

それで私は一種の強い決意を以てそこへ近づいている

ということがおわかりでしょう。」

このソネットの始めに出てくるロマンス (Romance)、サイリン (Syrén)、女王 (Queen) はいずれもスペインに對する呼掛けである。このようにスペインに呼びかけて、その詩歌——おだやかな琵琶 (serene lute) のような詩歌に別れを告げる。それはシェイクスピアに歸って現實の、にがい甘味 (bitter-sweet) を味わつてみるためなのだ。

ミルトンに對しては毎日のようにその素晴しさが増し、驚異にまでなっているのであった。そしてシェイクスピアと同格に扱われるべき詩人であった。一八一八年一月二十三日友人ベンジャミン・ベイリに宛てた手紙の中でミルトンに次のようなオウドを捧げている。

ミルトンの髪の毛を見て——

調和した韻律の首領！

天體を知る老いたる學者！

君の靈は決して眠ることなく、

我々の耳のあたりをめぐる。

永久に、永久に。

おゝ、何という狂わしい努力をするか。

君の、神聖な、高貴な^{ひびき}柩に、

詩と音樂の燦祭をささげようとする者は！

空の方へ、君は、實によくひびきをあげる！

美しい騒音の、生きた神殿よ、

そして君は耳ざわりな音をまぜ合せて調うた音とする。

歡喜に、新しい喜びをそえ、

樂しみに、もつと氣高い翼をそえて、——

おゝ、君の領土はどこか！

わかい詩人のちかいに、

君の耳をかしたまえ、——ほんとうに、

君の魂にかけて、

生きてゐる君の唇から流れ出したすべてのものにかけて、

地上のもの、

天上のもの、のなかにある美、

君が地上において愛したものの精髓にかけて、
 「私は誓う。」

あらゆる子供らしい詩風が、
 私の歌から消えたとき、
 私は情熱が灰色に老いて、

ずっとこの世に、

君と、君の作品と、君の生涯にふさわしい、
 歌と、音楽をのこそうと思う。

だが、今の焦燥と争鬪は無駄である、

苦惱も無駄である、——私が古い哲學を一ぱいた
 くわえ、

ちら、ちらと、未來をのぞいて見て興奮するまで。

(以下略)

更に翌一八一九年八月十四日同じくペイリに宛て、
 「日に日に私の確信は強まって行きます、(人間の友たる
 哲學者を除いては)立派な作家こそはこの世で一番真正
 な存在なのです。シェイクスピアと『失樂園』は日まし

キーツの精神像

に私にとつては大きな驚異になって行きます。」ところが
 がそれから丁度一ヶ月を経て、『失樂園』は本質的にす
 ぐれているが、我が國語の墮落である——ユニークなも
 のとして——珍品——美しく壯大な珍品として保存され
 なければならぬ。最も驚歎すべき世界的所産。ギリシ
 ャ語やラテン語の倒置法や文調に順應した北部方言。」
 (『一八一九・九・二一』
 『ジ・キーツ』)

りとして、チャタトンこそは傳統に忠實なイギリス的詩
 人でなければならぬとする。「思うに、最も純粹な英
 語——或は最も純粹なるべき英語——はチャタトンの英
 語である。英語はチョーサーのフランス語法によって墮
 落しきらない程度の歴史をもっていた、しかも尙、古い
 語が使われている。チャタトンの英語は全く北部のもの
 です。僕は詩脚で區切られたミルトンの英語の調トーンよりも
 チャタトンの英語の我國古來の調を好む。極く最近、ミ
 ルトンを警戒するようになった。彼を生かす所以のもの
 も僕を殺すことにならう。ミルトンの詩は藝人的氣分で
 なければ書けない——僕は別種の感覺に身を任せたい。」
 (『一八一九・九・二一』
 『ジ・キーツ』)

このほかにキーツが生涯尊敬もし影響もつけた詩人はワーズワスである。このようにしてふるい落されて残ったのは、シェイクスピア、ワーズワス、チャタトンの人となる。この三人のうちから更に最も偉大なものは——とキーツが問われれば勿論躊躇なくシェイクスピアを選ぶであろう。キーツには「シェイクスピアを讀んで、その眞底まで理解することが出来る」(ジ・ハ・ハ・ニ・ニ七)という自信があったし、シェイクスピアが常に彼の意識の大部分を占めていたことも事實である。實際また彼の素晴らしいシェイクスピア理解を裏付ける言葉がある。「何かしら價值のある人間の生涯は不斷の寓話であり、——そういう生涯の祕密を見ることが出来る人は極めて少ないのだ。——聖書のような生涯は象徴的であつて、——人々がヘブライ語の聖書を理解することができないように、そういう生涯を理解することもできないのだ。バイロン卿は目立つ人だが、象徴的ではない。——シェイクスピアは寓話の生涯を送つた。彼の作品は、彼の生涯の註解だ。——」(ハ・ジョー・ジ・夫・妻・宛)

實に的確な把握のしかたである。シェイクスピアを象

徴的 (Figurative) な存在としてとらえ、彼の生涯を寓話 (Allegory) の生涯と受けとる。シェイクスピアと言う一個の偉大な天才を理解するにはこう言う見方から出發して、結局またここに戻つて來るであらう。この手紙の書かれた一八一九年二月と言えばキーツが未だ二十四歳になつたばかりである。天才のおそろしさを感じさせる。ここで少しわきにそれるかも知れないが、常にシェイクスピアを意識している現代の詩人にエリオット (T. S. Eliot) がいる。エリオットは絶えずパラドクシカルな言辭を以てわれわれを驚ろかす。ハムレットは失敗作である、などと言うのは好個の例である。しかし彼の言葉の裏を返してみれば、何も特別變つた思想があるわけではない。變つてゐるのは言葉だけである。詩人は常に非個性的でなければならぬ、と説き或は、詩は情緒の開放にあらずして、情緒からの逃避だ、などと言うのも、とくにキーツが氣付いておつたことだ。われわれは常に言葉の魔術を警戒しなければならぬ。このエリオットは眞向うからローマン主義に反對する。ヒュームの影響下にあつた彼にしては當然の立場であらう。そしてキーツ

もエリオットにかかつては、ほぼ黙殺に近い扱いを受ける。しかもこの二人の詩人が同じように常にシェイクスピアを意識しなければならなかったことは皮肉と言わなければならぬ。そしてシェイクスピア理解にかけては果してエリオットがキーツを遙かにしのぐかどうか。私はかなり疑問にしている。

論をもとに戻さなければならぬ。キーツが一番強くシェイクスピアを意識していたのは単に尊敬の念からばかりではない。それは常にシェイクスピアによって現實に密着する姿勢をととのえようとするからに外ならぬし、また敵對と言ってしまうては言葉が強すぎるかも知れないが少なくともこれに似た感情を抱いていたことは見のがすわけにはいかないであろう。

Ⅱ

われわれはシェイクスピアがキーツにとっては最も大きな存在であることを知った。この事實はキーツが「人間性の讚美者」であったと言いきわめて簡単なことに歸著する。詩人は、かすみを食って生きて行く存在ではな

キーツの精神像

い。縹渺たる麗句を列ねて天界に遊ぶなどと言うことは詩人にとっては何のかわりもない。詩人もまず人間として生きることから始まる。アーノルド (Mr. Arnold) も言うように、詩は人生の批評であり、生き方を教えるものでなければならぬ。しかしまた單なる觀念の羅列にならては怒號には役立つかも知れないが詩と言うわけにはいかない。詩には詩の領域がある。詩人には詩人としての生き方がある。

たれしも、今生でほしがらるのは、美名だ。

それを眞鍮の墓にきざませて、

死の醜くさを美しくする飾りにしようよ。

生きているうちに、努力して榮譽を得ておけば、

たとい「時」が鶉のように貪婪であろうとも、

あいつの振う鎌の刃の鋭どさを鈍らせて、

名を久遠の未來世までものこすことができる。

〔戀の骨折損―一幕一場一―七行〕

これはキーツが一八一七年五月十日友人のヘイドンに

宛てた手紙の中に引かれたシェイクスピアの言葉だ。詩人の生き方はこう言う生き方に反撥する。「眞晝間の偉大」よりも「もの蔭の偉大」の方が眞の生き方の方向なのである。そして詩とはこう言うものである——「想像的な、家庭的な美しい數行を書いたからとて、あるエゴチストの氣まぐれで生み出された哲學を、我々は是非とも受入れなければならぬものであるか。誰だつて、獨特の思索をしないものはないが、その思索を虚偽に作り立てて、自己欺瞞をやるほどまで、それに思い耽つて、それを見せびらかすものはない。澤山の人々は、天の端までも行くことはできるが、その生半可な見物を書きとめて他人に見せる確信はない、サンチョーだつて、誰にも劣らず、天上行きの旅を考えるだろう。我々に對して、はつきりと、押しつけがましい意圖をもっている詩は私にはきらいだ、——もし我々が不同意ならば、ズボンのポケットに手を突こんでいるように見える詩も私はきらいだ。詩は、大きく、出しやばりでなく、人の肺腑をつき、詩そのものでびつくりさせたり、驚かしたりしないで、——その主題でそうすべきものだ。人目に立たぬところ

に咲く花は實に美しい。」(ハミルトン・ニ・ミジョン、キーツは實際この誠實さを生きてみせた少數の詩人のうちの一人なのである。こう言う生き方はいかにして行われたか。「一つの大きい人間的な目的のために死ぬ光榮を、私の究極の光榮としないわけにはいかないのです。」(ハミルトン・ニ・ミジョン)「一つの大きい人間的な目的」(a great human purpose)とは彼にとつては、「私は天賦の體力で堪えられる限り、詩の最高峰に到達する努力をしましよ。今後の作品について、かすかな構想を練るだけでもしばしば額に血がのぼります。私の望むところは、人事に關する興味を失いたくないこと」(チャード・ウッドハウス)なのである。現實の中に常に自分の眼をそそぐことによつて、詩の最高峰に登ること——それはまたキーツにとつてはシェイクスピアの跡を求めるところを意味するのである。彼が全幅の賞讃を與える詩人はシェイクスピア一人であつたからである。そしてまた「人事」(human affairs)とは何を意味するか。「風景は美しい、——しかし人間性はもっと美しい。芝生は、現實の強い英國人が踏むのでいよいよ豊かであり、——鷺の巢は、——登山

家がのぞきこむので、いよいよ美しい。」(ベンジャミン・ペイリ宛美は現實の中にあり、また美は現實によってその力を倍加させられる。キーツと言えば常に問題とされる美もこう言う方向からとらえて行かなければその意味はないのである。美そのものだけを取り出して架空の抽象觀念を樂んでいたのとはわけがちがうのである。(ここからキーツの一つの大きな問題が發展して行くのであるがこれは既に一度取り上げて論じたことがあるのでこれ以上は觸れないことにする。)現實に深く根ざさない美はあり得ないのである。前項Ⅰにおいてわれわれはキーツがミルトンと袂別したことを知っている。その原因となるものを主としてミルトンの用語に限っておいたが實は、もっと深いところに大きな原因があったのである。これは氣質の違いなどと言うなまやさしい問題ではない。「人間及び神に關するミルトンの哲學は、『失樂園』や、その他の作品から、あまり年寄りでない人々も、よく理解できるというのは、(内緒だが)、必しも不遜な言葉でなからう。ミルトンの時代には、英國人は丁度大きい迷信から解放されたばかりの時で、人々が握っていた推理の確

キーツの精神像

かな根據は、餘り新しいので、疑問をもたれなかつたばかりでなく、ヨーロッパの大衆はそれにひどく反對したので、却て、それが、精妙な、全く神的なものと思われたのである。——男の前垂れを初として、いく百の醜いものが棄てられた時代に、ミルトンが「コーマス」に書いた善徳、悪徳、貞節に關する觀念を誰が反駁することができたであろうか。人々がスミスフィールドの拷問や火刑から解放されたばかりのときに、誰が『失樂園』に描かれた善惡の諷刺を不満としたであろうか。宗教改革は、こういう直接の大きい利益を生み出したので、新教は、直接神の庇護の下にあると考えられ、新教に残っている獨斷や迷信は、そのとき、いわば、再生して、推理のよりどころ、見た所たしかな根據となつたのである。——ミルトンは、結局、何を考えたとしても、彼の書き物から判斷して見ると、自分で満足していたようだ。——彼はワーズワスのように、人間のハートに深くはいつて行くことはなかつた。」(ミルトン・レンズワース)こう言つた不満が用語に對する反撥と結びついて遂にミルトンを捨てるに至つたと考えるのが妥當であらう。ここに披瀝され

たキーツのミルトン觀には俄かに贊同するわけにはいかないがミルトンよりもワーズワスを上位に置いたキーツの心情はよく考へてみなければならぬ。彼の目に映つたミルトンはプロテスタントの因習、獨斷にとりこになつて動きのとれなくなつた詩人であつた。何よりもまず人間は、常に流動し發展して行くものでなければならぬ。そして流動を阻止するあらゆる因習、獨斷、迷信の彼方を見抜くものでなければならぬ。それだけの鋭さがなくて果して詩人と言ひ得るのであるか。彼によれば獨斷と迷信を生みだしたものはプロテスタントであつた。キーツ流に考へて行けば宗教こそ人間の束縛にはなれ開放にはならないのである。一切の邪魔をとり除いて真相につき進まなければならぬ。キリストがゴルゴタの十字架にかけられてからキーツの生きた時代までに既にざつと千八百年に近い歲月が経過している。この間にいくつの宗派が出来たであらうか。そして一體キリストは何處へ行つてしまつたであらうか。各派の主張してやまぬキリストが眞のキリストとすると一體どれが眞のキリストなのか。キリストは單なる宗教道具になつてしま

つてはいないであらうか。あるいはまた、教儀によつて押しつけられるキリストを無條件にあがめていければいいか。時代はこう言う疑問がいくつにも提出され得るところまで來ているのである。これに對してキーツは自分のキリスト觀を次のように告白する。「人性の中には純化しようとするエレキの火がある。——だからこれ等人間の間には絶えず新しい英雄的行爲が生れるのだ。遺憾なことには、我々はそれを見て驚かねばならぬということだ。芥の中に眞珠を見つけた時のように。僕の聞いたこともない幾千もの人々が全く私心を離れた心をもつていたことを私は疑わない。僕にはたゞ二人の人の名を思い出すことができるだけだ——ソクラテスとイエスだ——彼等の經歷がそれを證明している。」(『一八九・二・一四』としてソクラテスが一冊の著述も残したわけではないが、彼の精神は今日までも傳わつてゐる。同じことがイエスにも言えるはずだと論を進めながら、「イエスの經歷が、宗教の方便的な虚偽に興味を有する人々によつて書かれ、改訂された」といふことは歎かむべきことだ。それでもこれを通して彼の輝かしさを窺ふことができる。」(上)詩人

の言葉である。これを通して (through) 即ち一切の障害を貫いて眞のイエスの輝きが見えると言うのである。全く私心を離れた心を持つ (completely disinterested) とはいかなることであろうか。自己を零ゼロに還元して完全に他のものと合體し得る能力を備えていることである。他のものに合體し得る能力とは、詩的天才 (Poetic genius) を指す。あるいは言葉を換えれば想像力 (Imagination) を指すと言っても同じである。キーツの目にはキリストもソクラテスも最高度に詩的天才、ないしは想像力をもつ人間であった。キリストを神としてではなく一個のすぐれた詩人として把握したのである。眞の詩人を求めようとすればこの二人が必ずその項目の中に入れられなければならない。しかしこの把握のしかたは決してキーツの宗教的苦悶の結著ではないことは明らかである。概して當時の詩人がそうであったように彼の精神の中には宗教的苦悶が見られないのである。このようにキリストを詩人の項目の中に織り込んだ精神態度はキーツを彼獨特の生き方に導いて行く。自からの哲學が打ち立てられなければならない。

キーツの精神像

キーツは最初に生存の場を「實に心情 (heart) が種々様々に感じ苦しまねばならぬ場所」(『八一九・四・一五』) であると規定する。感じ方が複雑であればそれに伴う苦惱も複雑なものとならなければならない。苦難に充ちた谷間こそこの現世なのだ。さらに頭腦においても常に固定觀念が出来あがるのを警戒しなければならぬ。出来あがった固定觀念を精神の安住の場とすり換えることはとりも直さずキーツが激しく反撥したミルトンの亞流になリさがることではないであろうか。「精神 (mind) をしてあらゆる思想の通路たらしめる」(『八一九・九・二四』) と言う冒險を絶えず繰返すことによってこの陥穽にはまり込ままなないようにしなければならぬ。知、情を動員し不出來上るものは既に古いとする常に破壊を伴った新しいものへの展開を目ざして行かなければならない。ここにあるのは鋭い批評精神であり、流動性を不可缺の條件として人間に要請する彼のヒューマニズムである。ヒューマニズムはこれを實際に生き抜くことよってのみ眞の名前を獲得する。いかに精緻をきわめた理論でヒューマニズムを築いて見せたところでそれは畢竟一個の美しい確

子細工にすぎない。ヒューマニズムは現實に生きることによつてのみ作り出されて行く。現實は苦しい。そして人はこの世を、涙の谷と言ひ、また、悲しみの谷と呼ぶ。しかしキーツはこの名稱をきっぱり返上しながら、「魂を作りあげる谷」(The vale of Soul-making) (ジ・ハート・ソール・メイキング) と呼ぶことを決意する。キーツの精神の強靱さは病弱な彼の外面からは全く想像もつかないものである。しかれば彼の言う「魂」(Soul)とは何であるか。キーツの考えを簡単に述べれば次のようになる。魂とは理知から、はっきり區別されるものであり、人間性の奥底にひそむ神性のひらめきとも言ふべきものであつて、「神自身の本質のひらめきを有する同一性」(Identical Souls)であり、これが現實との無限の相剋によつて鍛え作り上げられるものであるとする。そしてキーツはこの生き方こそキリスト教よりも更にすぐれた人間の救済であるとし自からこの生存の道を撰んだのであつた。そして詩人へのみ許された想像力と自からの精神をあげし、現實に對決させることによつて得られた魂への確信が交叉して、彼晩年の重要な作品である「ハイピリオン

没落」(The Fall of Hyperion)の哲學へと發展して行く、たしかにキーツはここにおいて確固たる一つの哲學へと到達した。しかしこれは彼にとつては精神發展の一つの道標にしかすぎなかつた。と言ふのはⅡの末尾において觸れたように、シェイクスピアが大きく立ちはだかつていたのである。詩人にとつて一つの哲學を作りあげることとは決して目的ではあり得ないはずである。シェイクスピアのような詩人になるか、もしくはそれが不可能であるならば、出来るだけこれに肉迫することの方が大きな課題であらう。前から劇への關心をかなり強く抱いていたことは次のような言葉からしても推察に難くない。

「私の大望の一つは、キーンが舞臺で行つた大革命を現代の作劇において行ふことです。今一つの大望は退屈な談話に耽る青踏文學界を覆へすことです。數年の中に以上二つの事を果せば、以て瞑すべきであり、友人達は私の墓のほとりでクラレット一打で祝杯を擧ぐべきです。」(ジ・ハート・ソール・メイキング) キーン (Edmund Kean, 1789—1833) と言へば當時のシェイクスピア俳優の名手であ

る。殊に「ベニスの商人」に出てくる高利貸しのユダヤ人シャイロックはその得意とする役であった。この名優に自分の書いた劇をやらせようと言う魂膽であった。そして書きあげたのが悲劇「オットー大帝」(Otto the Great)である。この出来ばえには相當の自信を抱いていた。「僕の書いた悲劇は相當な出来だと信じている。それを書き上げた途端にキーンのアメリカ行の決心を聞いたが、そんなことさえなければ、一身代出来ただろうに。これほど悪い報せを聞いたことがない。」(『ハーバート』七)かくして彼の野望は挫かれた。そしてこの劇は彼の自信にもかかわらず失敗作であった。更に同じく悲劇「ステーン王」(King Stephen)に著手したがこれは未完に終った。作品においてシェイクスピアに迫ることが出来なかつたのである。肉體の健康が許したらこの失敗から彼はいかなる立ち直りを見せたか——興味あることであつたらうがこの頃の彼の身體は極度に弱りつつあつた。あと一八二一年二月ローマに客死するまで療養に努めなければならなかつた。ここで彼の極めて短かつた生涯は終る。今まで見て来たように超越的存在を斷乎とし

キーツの精神像

て拒否しつつ、人間の立場に優位を認めながら生きた彼の精神史こそ神にそむいた近代人の進まなければならぬ方向を示すものではなからうか。そして彼の精神形成は全く孤獨の裡になされた。人間は本質的には孤獨的存在であるかもしれないが、われわれはキーツにおいて孤獨の本當の意味を悟るような氣がする。しかしキーツの精神は自己の孤獨を意識する暇もなかつたように、ひたすら尖端的に流動し、新しい展開を示して行つたのである。人間の本當の生き方はこうしたものでなければならぬであろう。

(付記) 引用した書簡の翻譯は佐藤清、梅原義一兩氏のものを使用させて頂いたが、假名使いは統一しておいた。兩氏の翻譯にない箇所には拙譯をあてた。底本としては、*Letters of John Keats*, ed. by M. B. Forman, 1952. Oxford. を用いた。